



第66号
令和3年2月26日

発行所
宮城県伊具高等学校
同窓会
宮城県伊具郡丸森町雁歌51
TEL 0224-72-2020
URL <http://www.igukou.com>
発行責任者 鈴木英晴

印刷所
佐藤印刷株式会社



百周年、新たな一歩へ

同窓会会長
佐藤吉市

令和2年11月6日(金) 12時30分、高橋光弘校長の式辞で開式、県知事代理県教育委員会教育監兼教育次長松本文弘様、丸森町長保科郷雄様の御祝辞を賜り、248名の式典参加をいただき、16時まで厳粛かつ有意義に宮城県伊具高等学校創立百周年記念式典が行われました事、同窓会員皆様に報告できます事は御同慶の至りであります。

平成28年2月に実行委員会設立準備委員会を立ち上げ、設立総会を12月に開催し、記念事業の方向性を、①記念式典、②記念誌の発行、③記念祝賀会、④記念講演・アトラクション、⑤感謝状、⑥当日の記念品と定めて、学校・同窓会・PTAが協力して事業を進める事を確認し、4年あまりの期間をかけて、事業を推進して参りました。しか

し、令和元年台風19号は東日本各地に未曾有の被害をもたらし、丸森町は特に甚大であり、本校も川向農場は壊滅的な被害を受けました。復旧に向けて順調に回復が見られましたが、令和2年には新型コロナウイルス感染症が世界的大流行を引き起こし、緊急事態宣言が拡大され、事業の開催も危惧されましたが、案内者を絞り祝賀会を中止する等コロナ対策を重視し、安全対策を最大限実施しながら開催することに決定し、実現できたところ。同窓会・PTAの役員、そして校長先生をはじめ現職員の皆様方の御支援・御協力に対し、改めて衷心より御礼申し上げます。

大正9年、伊具地方の農業発展の願望として伊具郡立伊具農蚕学校が角田市に開設され、そ

の後幾多の試練を経て、県・角田市・丸森町の御協力・御支援をいただき、昭和13年に雁歌に移転、昭和24年に県立伊具農蚕高等学校に名称が変わり、高等学校としての地位を確立してきました。

大正・昭和・平成、そして令和に変わり、地域と共に発展し続けていることは、同窓生として喜びに堪えないことであります。この間に男子8231名、女子6033名、合計14246名の卒業生を輩出し、宮城県はもとより全国で活躍されている話題をお聞きする事もあり、うれしい限りであります。地域振興にも貢献していると確信する一人でもあります。

時代を経ても変わらずに在校生・同窓生を支え、教え続けられてきたのは「校訓」・「校章」・「校歌」であります。

校訓には「質実剛健(飾りつ気なく、まじめで、意志強く、しっかりしていること)」・「穩健着実(学校の生活態度は、おだやかで、おちついて軽率でないこと)」とあります。この校訓は卒業後になって実社会で生かされており、私はまだまだ校訓に至っていないようです。

校章は昭和23年4月、学制改革による宮城県伊具農蚕高等学校の設立と同時に制定されたようです。本校のシンボルである稲束(農)と桑の葉(蚕)に、新

制高校の(高)の字を配し、外部の稲束の輪は、強調する「和」の精神と円満な人間像を意味し、三方に展開する桑の葉は、「知・情意」を表します。「高」の字は、本校目標の到達目標を示しています。すなわち、教育の目標は人格の完成にあるという理念のもと、その基盤となる高い教養の涵養を旨とすることを表現して、デザインも一緒に元本校教諭佐藤正三氏が作成したようです。

校歌は昭和25年12月13日に制定されました。それまでは校歌がなく、当時の先輩の皆様が校長に直談判したようですが、資金がなく待つてほしいと言われ、その2年後の創立30周年記念大会にて校歌の創作発表会があり実現したようです。作詞は宮城県旧築館町出身で日本の代表的詩人である白鳥省吾先生です。きっかけは、省吾先生の甥(敬一さん)が母校の国語の先生として約6年間在職されたことが縁で、当時の教務主任であられた佐藤正二先生(金山出身)達で白鳥先生に決定し、作曲は「古閑裕而」先生にお願いしたようです。予算はそれぞれ3万円で、古閑先生からの快諾の手紙が母校に残っております。折しも令和2年のNHKの朝ドラ「エール」が放映されましたので、役員の士気が上がり、至る所で校歌が話題になり、百周年記念の宣伝になり、盛り上がりの一役

になりました。式典ではコロナ禍でしたので、録音されたものを流すだけで、声高らかに歌う事が出来なかつたのは残念の極みでありました。

昭和23年には定時制課程の設置が許可され、大内・筆甫・大張・耕野にそれぞれ分校が置かれました。はじめは各分校とも独立校舎を持たず、ほとんどが小・中学校の一角を借りていたようですが、その後の統廃合により大内分校・筆甫分校・大耕分校として、多くの卒業生を送り出しました。しかし、町の過疎化が進み、少子化により昭和48年、50年にそれぞれ閉校になり、定時制課程教育27年間の歴史を閉じたのは残念であります。

百周年の歩みは、県・市・町・地域の関係者、そして同窓会・PTA・歴代の校長先生をはじめ旧職員・現職員皆様方による発展振興に献身的な努力・協力の賜物であり、ただただ頭の下がる思いであり、改めて心から感謝申し上げます。

この百周年式典を基に、新たな一歩を踏み出し、

阿武隈川は洋々と
岸に栄える丸森に
文化の光ささぎかけて
伊具高校の輝けは
清き窓べに鳥もなく
伊具高校の校歌が響き続ける
事を切に希望します。

(農業20回・大内支部)

阿武隈川は洋々と
岸に栄える丸森に
文化の光ささぎかけて
伊具高校の輝けは
清き窓べに鳥もなく
伊具高校の校歌が響き続ける
事を切に希望します。

(農業20回・大内支部)



魅力ある伊具高校を 目指して

校長
高橋 光弘

同窓会の皆様方には、母校の教育活動に御理解と御支援を頂きまして誠にありがとうございます。昨年11月6日には創立百周年記念式典を無事に挙行することができました。これも同窓会の皆様方の御理解と御協力の賜と心より感謝申し上げます。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために参加者を少なくせざるを得ず、会員の皆様をお呼びすることができず、非常に残念でした。生徒、教職員並びに参加者の健康を優先させていただきましたことを御理解いただければ幸いです。

記念式典では式辞の中で、百年の歴史を振り返り、先輩方が学校の礎を作り上げた二つのお話を次のように紹介しました。さて、百年の歴史は決して平坦な道ばかりではありませんでした。大正9年に開校し、大正12年に角南学校組合立として旧八雄館に移転、翌年に丸森小学校の隣に移転、昭和14年4月1日に県立に移管し、昭和17年9月1日にこの現在地に新校舎が落成し移転いたしました。昭和23年4月1日に宮城県伊具農蚕高等学校と改称し、7月には定

時制も開講しました。昭和38年4月1日に宮城県伊具高等学校と現在の校名になり、農業科、商業科、生活科と学科変更いたしました。昭和48年度には全日制農業科1学級増となり、地域農業の人材育成に寄与して参りました。平成2年11月14日には創立七十周年記念式典を挙行し、翌年平成3年1月には同窓会の皆さまの御尽力により雁歌会館を建設していただき、教育活動の充実を図っていただきました。現在の総合学科に改編しましたのは平成11年4月で、教養、農学、機械、電気、情報、福祉の6系列4クラスでスタートし、実学中心の教育を創立以来一貫して継続して参りました。平成21年4月から現在の4系列3クラスの体制になりました。百年の時の移りと地域の産業構造の変化により、三度の校名変更や定時制の設置・閉講、学科の変更、学級の増減と、幾多の変遷がありました。

動かし、学校の伝統を創られました。二つのことを紹介します。一つは生徒会誌「雁歌」がどのようにして創刊されたかです。これは当時生徒会長だった先輩が、生徒会室の書棚に保管されていた他の学校の生徒会誌を手にしたことが切っ掛けでした。なぜ本校には生徒会誌がないか、当時の先輩方に尋ねたところ、発行の機運はあったが資金がでまず実現出来なかったというのを聞き、その後その先輩は3年生になり、生徒会誌を発行するために生徒会長になったそうです。何度かの会議を経て同意を頂いたのですが、最大の問題は資金だったようです。生徒会各部の活動予算から捻出しようと了解を何とか得ることができたものの、部活動の停滞を招く懸念を考慮して生徒会顧問の先生方の尽力で、創刊号発刊の資金は学校側で捻出することにになり、その先輩はホッとしましたと記念誌に記しています。資金の目処がたち、編集作業に取りかかり、タイトルには応募の中から「雁歌」に決定したそうです。一人の生徒の熱意と周りの人たちが協力した賜であり、生徒が中心に生徒会誌を創刊し、歴史と伝統を現在までつないでいることは本当に素晴らしいことです。

具農蚕高等学校としてスタートしましたが、実習作業が毎日、学習もままならず進捗することもあり、改善を校長先生に申し入れても、受け入れてもらえず、それならば他の学校はどうなのか見学しようと巨理高校に向かったそうです。全校生徒の迎えがあり、体育館に案内されて、声高らかな校歌で歓迎されましたが、お返しに本校の校歌をお願いしますと求められても歌う校歌がなく、悔しい気持ちばかりが残りに、学校に戻ったそうです。早速、校長先生にお願いしたそうです。返答があり、その後、卒業生も多くなり、同窓会の気運も盛り上がり、現在の白鳥省吾作詞古閑裕而作曲の校歌が誕生したそうです。

令和2年度総会報告

8月9日(日) 午前10時
(評議員会午後2時)
母校第1実習棟
レクチャールーム

最後にありますが、今後とも母校が地域に存続し続けるためには、同窓会の皆さま、PTAの皆さま、地域の皆さまとの連携が必要不可欠になります。さらに、地元自治体丸森町・角田市の御支援が必要です。県立高校である伊具高校を地域で創り上げる時代です。どうぞよろしくお願いいたします。

- ◎協議事項
 - 一 令和元年度事業・会計報告ならびに承認について
 - 二 令和2年度事業計画・予算案承認について
 - 三 母校創立百周年記念事業について
 - 四 母校創立百周年記念本会事業について
 - 五 その他
- 今年度はコロナ禍のため、参加者を本部役員および支部長に限定したほか、評議員会および懇親会の開催を見送りました。佐藤会長の挨拶では総会がこのような形で開催される経緯が話され、続いて高橋校長先生が学校の現状を説明しながら挨拶されました。協議事項に入り、始めに令和元年度事業・会計決算報告および令和2年度事業計画・会計予算案が承認されました。続く母校創立百周年記念事業、および母校百周年に関する本会事業にしましては、さまざまな建設的な御意見を頂きました。特に昨年10月に襲った台風19号による甚大な被害の中で、多くの地元企業や会員の皆様に御協賛いただき「懸垂幕昇降装

大嘗祭への 栗献上に対し

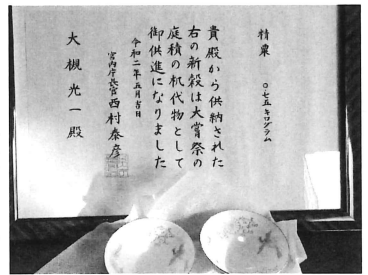
両陛下より杯が贈呈

大槻 光 一様
(農業18回・大張支部)



大槻光一様は8年前より宮城県を代表して新粟を天皇陛下に献上

されてきましたが、この度、生産された粟0.75kgを「大嘗祭」の庭積の机代物として献上され、天皇皇后両陛下より盃が贈られました。大嘗祭は天皇の皇位継承の際にのみ行われる宮中祭祀ですから、今回の供進は非常に稀な榮譽だと言えます。大槻様はこれまで地域の活動に熱心に、また誠実に取り組まれてきました。このようなお人柄が皇室からの供進を依頼されるようになったのだと思います。大槻様は12年ほど前に「大張雑穀研究会」を立ち上げ、雑穀の研究を重ねていらっしやいます。6穀すべてを生産するのは大変なことなのですが、「大張り切り『6穀米』」を生産販売され続けています。また、日本の棚田百選に選ばれている「沢尻の棚田」の管理を行う沢尻棚田集落協定の代表もされています。今年度は母校農学系列の3年次生7名の「棚田プロジェクト」でもご指導いただき



ました。中には初めて棚田を見るという生徒もいたようですが、収穫まで貴重な体験をさせていただきました。今年度は沢尻棚田写真コンテストも行われ、169点もの応募があり、母生徒も特別賞をいただいています。見学に訪れる方も随分多くなっているというのでした。

帰り道、棚田を訪れると「沢尻棚田交換ノート」が置かれていました。大槻様のこの景観を後世に残したいというお気持ちかノートの最初のページに記してありました。その言葉に込めるように「この景観を作つてくれる、地区のみなさんの努力に感謝します。ありがとうございます。また訪れたいと思います。」と来訪者の言葉が添えてありました。

(事務局 鈴木英晴)

交通栄誉賞

「緑十字銀章」受章

佐藤 利美 様

(農業22回・大張支部)

この度、佐藤利美様は交通安



全指導や啓蒙活動に長年取り組まれたことから、交通栄誉賞「緑十字銀章」を受章されました。これは昨年1月22日に東京都の文京シビックホールで行われた一般社団法人全日本交通安全協会が主催する交通安全全国民運動中央大会で表彰を受けたものです。

佐藤様は平成10年から今日に至るまでの23年もの長きにわたり、角田地区交通安全協会大張支部長を務められています。協会の活動は年間60日を超えるそうです。春や秋の交通安全運動での街頭指導をはじめ、交通安全祈願祭や小学校の見守り隊のほか、推進協議委員にも委嘱され、支部内の会員に警察署や協会からの連絡事項を伝達するなどの活動も行っています。大張地区の道路脇には交通安全を呼びかける看板を見かけますが、これは交通安全協会大張支部の活動によるもので、令和元年度の県事故防止コンクールで最優秀支部に選出されました。支部長になってから支部内で3件の死亡事故が発生してしまったと悔やむ佐藤様。普段はユーモラ

親睦を深め母校を支える13支部

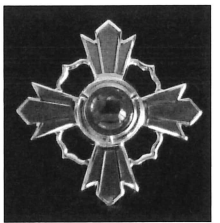
本会には県内外に13の支部があり、母校と連絡しながら会員相互の親睦を深め、母校の発展と地方文化の向上を目的として活動しています。近年は支部の活動が活発になり、多くの方々に活動に参加いただいています。創立百周年を迎えた母校をさらに盛り上げていくためにも、より多くの会員の皆様とのつながりを大切にしていきたいと考えています。支部の活動に興味をお持ちの方は、同窓会事務局 鈴木英晴 (Tel.0224-72-2020) までご連絡ください。

本会の支部

- 丸森 金山 大内 筆甫 小斎
- 大張 耕野 舘矢間 角田 柴田
- 白石 仙台 関東

スでにこやかな佐藤様ですが、支部長としての交通安全に対する責任感と使命感を感じることができました。佐藤様は椎茸栽培をお仕事にされており、原発事故の際には出稼ぎも考えたということですが、現在は岩手の榎木で栽培が継続できており、森林組合から委託されてスギ花粉症のワクチンに利用する原料取りも行っているというのでした。自営業とはいえ、日中の多くの時間を交通安全活動に捧げることが、誰もが真似できることではありません。今後もお元気で協会の活動やお仕事にお励みください。

(事務局 鈴木英晴)



置一式」と「懸垂幕2枚」を東校舎に掲げることが出来たことに對しまして、その御厚意を大切にしたいとの御意見を多く頂きました。11月6日に予定された記念式典に向けて、総会参加者の母校愛に燃えるお気持ちで伝わる総会となりました。

(事務局 鈴木英晴)



母校創立百周年記念式典開催

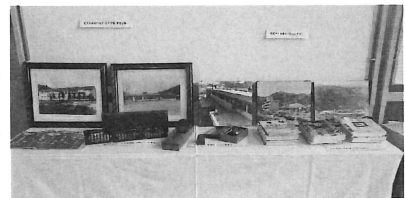
創立百周年事業を振り返って

主幹教諭 阿部茂夫

10年前に宮城県伊具高等学校創立90周年記念事業を担当しました。このときは何もわからず当時の同窓会長を始め多くの同窓会役員・PTA役員の方々に助けられたのを



厳かに行われた記念式典



会場内に展示された思い出の品々

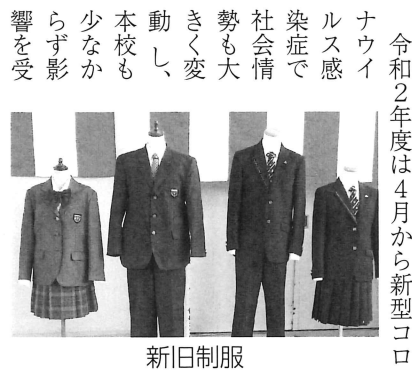
覚えています。このときは式典2年前に主担当を命ぜられ、準備に取りかかりました。土日返上でパソコンにデータを入力したりと、大変苦労したことを覚えています。今回の宮城県伊具高等学校創立百周年記念事業は平成28年2月22日(月)に準備委員会が発足しました。その後平成28年12月8日(木)に実行委員会が発足し各役

創立百周年記念事業概要

令和2年11月6日(金) 第2体育館

- ◆記念式典 12:30～13:30
- ◆記念講演 13:40～15:10
演題「ラビアンローズ～バラ色の人生～」
講師 十和田バラ焼きゼミナール
舌校長 畑中宏之氏
- ◆アトラクション 15:30～16:00
農業クラブプロジェクト発表
「風の導き、歴史が残した一穂」
家庭クラブプロジェクト発表
「災害に負けない地域の絆」
食農教育紙芝居コンクール応募作品発表
「みんなとあえるまで」
- ◆記念品
校名入りボールペン、校名入り文鎮
伊具高産キューブ米「だて正夢」・メロン(農学系列作成)
エコバッグ(福祉系列作成)
- ◆記念誌「雁歌の里」発行
発行部数 1,000部

員が決定しました。本会の組織は同窓会・PTA・学校職員で構成され、同窓会長が委員長を務め同窓会とPTAからそれぞれ副委員長が選任されました。事務局は学校職員が担当しました。実行委員会・常任委員会・専門委員会が組織として設置されました。準備員会では記念事業として何を行うか多くの案が出されましたが、最終的に6つに絞られ、式典・記念誌・祝賀会・講演アトラクション・感謝状・記念品と決定し、それぞれが専門委員会として記念事業を行うこととなりました。実行委員会が立ち上がりましたが、私が主担当と命ぜられたのは、やはり式典2年前の平成31年4月でした。私



新旧制服

が、同窓会の佐藤吉市会長とは公私に渡りお世話になっており、また同窓会の小形とき子副会長は伊具高校事務長として在職され、お世話になったので頑張ろうと思いました。

令和2年度は4月から新型コロナウィルス感染症で社会情勢も大きく変動し、本校も少なからず影響を受

けました。3密を避けソーシャルディスタンスをとりながら実行委員会開催は非常に苦しいところがありました。また本校の体育館の規模を考えると300人程度と考へ来賓の数を減らしての開催になります。

式典は令和2年11月6日(金)に校長式辞から始まり約1時間で開催されました。今年度より今年が新制服になりました。記念講演は青森県十和田市から十和田バラ焼きゼミナール舌校長の畑中宏之さんを招いて「ラビアンローズ～バラ色の人生～」と題して講演をしていただきました。地域を支える高校生の姿についての内容で、「高校生は地域の宝」ということを熱弁されていきました。

アトラクションは3つ発表を行いました。一つ目は農業クラブの「風の導き、歴史が残した一穂」と題して米粉パンの製造です。二つ目は家庭クラブの「災害に負けない地域の絆」と題してボランティアの在り方です。三つ目はトマトの成長を表したもので「みんなとあえるまで」を発表しました。来賓の方々から「素晴らしい」というお褒めの言葉をいただきました。

記念誌は「雁歌の里」という誌名で、発刊に寄せての挨拶から始まり、第一部「沿革の概要」、第二部「通史編」創立七十周年から百周年までの三十年、第三部「回想編」(寄稿文、名簿編で構成されています。全153ページです。記念品は生徒が作成した物を中心に、来賓の方々それぞれ配布

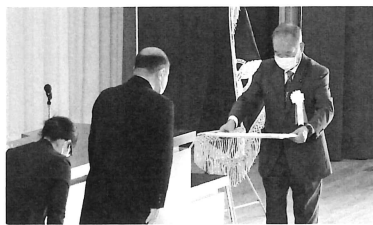
しました。伊具高産の「キューブ米」文鎮、エコバッグ、それと外注のボールペンです。

感謝状は実行委員長である佐藤吉市氏へ校長より贈呈されました。祝賀会は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、令和2年8月27日(木)の常任委員会で中止が決まりました。

以上のように準備委員会から式典まで5年の計画で進み、滞りなく開催されたのは、今事業に携わった皆様のおかげだと思っております。

式辞

創立百周年記念事業実行委員長 佐藤吉市



呈贈された感謝状が佐藤吉市実行委員長に

令和2年11月6日、節目となるこの良き日に、伊具高等学校創立百周年を迎えることになりました。

た。コロナ禍で社会情勢にも大きく影響を及ぼしている中ではあります。席をくださった皆様、この式典が盛大に挙行されますことは、この上ない喜びとするところであります。

「水とみどりの輝く町」のキャッチフレーズが丸森町にはあり、一級河川の阿武隈川は舟下りができ

る観光名所として有名です。また、阿武隈川水系の内川には不動尊公園が隣接しており、風光明媚で山紫水明の里とも呼ばれています。町の中央には齋理屋敷があり、時代の移り変わりを楽しむことができます。また、東に向かえば伊達政宗の初陣の地として有名な丸山城跡地や戊辰戦争があった旗巻古戦場跡地、西に向かえば沢尻の棚田や柿干し場のあんぼ柿が有名で、観光地としては最高の場所だと思います。

伊具高校の歴史は、人間に例えれば「百寿」にあたり、ため息が漏れるほどうらやましい到達点でもあるものです。人間の歩みというものは中途半端なものではなく、幾多の挫折、やまい、しがらみがあり、それをくぐり抜けてきた命の結晶でもあるのです。伊具高校も同じことで、まさに紆余曲折、不沈起伏に富む波乱の歩みでありました。あらゆる艱難辛苦をはねのけ打ち立てた金字塔なのです。世に学校は母なる存在で、文字通り母校と呼ばれる育ての母でもあります。伊具高校に入り、来たりし1万4千名を育み育てた偉大なる存在であります。ここ百年の歩み、それは伊具高校に関わった人として、教師と生徒、そして学校を愛護し続けたこの丸森の尊い生活の記録でもあります。

昭和51年6月に素晴らしい学び舎が立ち、数多くの入学生がこの校門をくぐりました。教室から見る満開の桜は、私たちに夢と希望を育ててくれました。そして、先生方との出会い、旧友との語り合

いの中で勉強に励み、クラブ活動に汗を流しながら、先輩後輩の絆を深めて過ごす3年間、そして卒業、その繰り返しを積み重ねたものが現在の姿です。

私は昭和41年4月に入学し、旧校舎で3年間学びました。日中は農業実習を、夕方は野球部の練習にいそしみました。卒業式では白鳥省吾作詞、今話題の古閑裕而作曲の校歌を声高らかに歌ったことを覚えていきます。

伊具高校の式典は節目毎に実施してきました。平成2年11月に七十年記念誌「風雪に耐えて七十年」を、平成22年11月には「新たな世紀に向けて」を発刊しました。この度は百年の歴史を物語った「雁歌の里」を発刊することができ、非常に嬉しく思っております。

本校百周年の歴史を育てていただいたのは、長らく伊具高校を愛護育成していただきました宮城県丸森町、角田市、そして地域の皆様、また、本校発展のために献身的なご協力とご支援を賜りましたPTA、同窓会、旧職員、現職員の皆様に深甚なる感謝と敬意を表します。本日、会場にご臨席の皆様のご健勝と伊具高等学校の益々の発展を願って挨拶とさせていただきます。

結びに、本校の校歌、作詞、栗原市出身、白鳥省吾先生、作曲古閑裕而先生の一節を謡います。
阿武隈川は洋々と
岸に栄える丸森に
文化の光さきがけて
伊具高校の輝けは
清き窓辺に鳥もなく

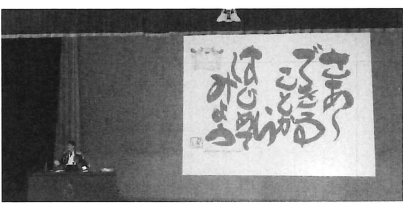
創立百周年記念式典を終えて

同窓会副会長 湯村 勇
(農業26回・角田支部)

伊具高校同窓会の皆様方、こんにちは。新たな年を迎え、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、昨年は新型コロナウィルスでオリンピック、パラリンピックなど多くのイベントが延期や中止に追い込まれる中、本校創立百周年記念式典は予定通り、11月6日、本校第二体育館で行われたことは最高の喜びでした。ただ、人数の削減や会場変更などで本来の計画とは規模が小さくなったことは極めて残念でなりません。

ここで、記憶に残る記念式典の模様を簡単に振り返ってみます。ご来賓の保科郷雄町長は「地域農蚕業の人材育成を目的に設立以来、時代のニーズに応えながら、百年の間、堅実な校風と伝統を築かれてきたことはすばらしい」と述べられました。

また、記念講演の十和田バラ焼きゼミナール 舌校長 畑中宏之先生は「ラビアンローズ」バラ色の人生」は、美容室経営から焼き肉店に事業を変え、自分が住む十和田市内の活性化に成功したという



記念公演

また、記念講演の十和田バラ焼きゼミナール 舌校長 畑中宏之先生は「ラビアンローズ」バラ色の人生」は、美容室経営から焼き肉店に事業を変え、自分が住む十和田市内の活性化に成功したという

体験談でした。「人も街も磨けば必ず輝く」をモットーとして『食によるまちおこし』に取り組みながら、全国を飛び回り、十和田市のPR活動に力を入れている話に感動しました。

今回の創立百周年記念式典を振り返り、そして、この次の記念式典を展望してみました。

この次の伊具高校の周年記念はいつになるのだろうか。私は自分の年齢を考えますと、タッチできないと思います。ただ、角田・丸森の児童・生徒数を考えますと、本校の単独校はいつまで続くのだろうか。心配になります。できれば「伊具高校」が独立校として永遠に存続して頂きたいと願うものであります。

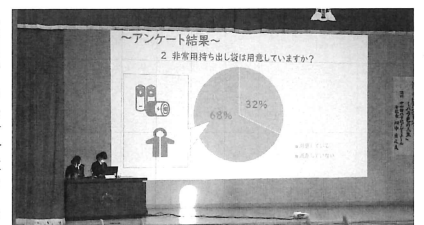
結びになりますが、母校のますますのご隆盛と同窓会員皆様方のご健勝をご祈念申し上げます。

創立百周年記念式典

3年 川崎 結

令和2年11月6日、伊具高校創立百周年記念式典が行われました。校長先生や来賓の皆様、実行委員の方の挨拶を聞き、百年もの間歩み続けてきた伊具高校の歴史の重さを感じました。

記念講演は「十和田バラ焼きゼミナール」舌校長の畑中宏之さんにお話しいただきました。畑中さんのお話を聞いて、「十和田バラ焼きゼミナール」で行われてきた活動や実績について知ることができました。その中でも特に印象に残った話は、元の学生、高校生と



在校生によるアクション

連携した活動もさされているというお話しでした。私も身、まちづくりという町おこしの活動や、情報

生徒の学習発表では、農学系列、福祉系列、紙芝居製作チームの生徒が、これまでに行ってきた活動の成果を発表しました。私も紙芝居製作に参加し、オリジナルのストーリーと絵をみんなで考えて製作したものを発表させていただきました。式典の中での発表ということで、思ったより緊張してしまいました。

宮城県内の他の高校では、近年統廃合が見られますが、伊具高校は百年間変わることなくこの地に存続してきました。この式典で、そのことを改めて感じる事ができました。このような歴史ある伊具高校が母校となることに、誇りを感じました。

特別寄稿

伊具高百周年を祝して
汗してこそ道拓く・
夢拓く、かいこはく
人生たらむ!

第9代校長 山田 諄

伊具高の誇りある歴史と伝統を語らい、継承の大きな節目である伊具高の尊い創立百周年の悠久伊具高（宮城県伊具農蚕学校大正9）の傘下にあつて、年々歳歳、伊具高に学び、それぞれに、校訓『質実剛健』『穩健着実』を背にして、たくましく青春を謳歌した同窓のみなさまの響きある心意気を強く感じてなりません。

顧みて、校歌「次郎太郎を望み見て」を口ずさみながら作成した伊具高創立70周年記念事業「雁歌会館」の基本設計計画図が彷彿されます。

もちろん、伊具高教育の真髄は、教育活動は素より課外活動を高く評価し合うことができた。

目に浮かぶ青春の燃焼昇華とも云えるスポーツ面では、地道な計画的・継続的な訓練・学習の開花を見る弓道をはじめ、柔道・卓球・野球各部の1・



山田氏が設計した雁歌会館

2年生フレッシユコンビの頑張りと勝利の感動をみんなのものとして分かち合い、一人ひとりのものとして広めていくよう願いながら、高校生の祭典「平成2年インターハイ宮城大会」で、大会場の草花装飾の育苗植栽協力をはじめ、大会出場選手として、伊具高健児の心意気を世に問う活躍であります。

要は、呼ばしてもらったシルクとミルクの里丸森の建学の精神を心の支えにしなから、将来とも価値ある人間、そこになくてはならない人間としての資質を高めてほしいと呼びかけました。

ところで、かいこはくを解して、蚕掃く（掃き立て）ではなく、「カイコは、敵から身を守るために、口から糸を出して繭を紡ぐ、（フアーブル『昆虫記』とパスツールとの対話）」から考えて、ここでは、『蚕だけが糸を吐く』の表現の意から考えて、いま地球には何千万の昆虫の殆どが木の芽・葉っぱを食べ、糞として排泄するに過ぎないのであります。

しかし、蚕だけは、繭となつて、美しい価値ある絹糸をつくり出しています。

このことは、人間も全く同じであると思います。何故なら、『人生』と云う葉っぱを食べて、ある人はほんやりと自分本位に一生を終える。ある人は、世の

ため、人のため、仕事のために、美しい思い出を残して旅立つ。「人の違いは、一体どこにあるのか？」を問いかけているものかと思えてなりません。

そこで、これからは、「いまやるべきことは、いましかない」苦しい・辛いことから逃避し、遊んではかりいる事を戒め、忍耐の二文字を背負いながら、克己心をもって、何事もやる気を奮い起こし、やればできることに自信と誇りを持ちたいものであります。

そして、先人の歩んだ道を回顧し、古き良さを尊び、新しき創造の付加を心の糧にしなから、悠久発展の伊具高生活を自らのものにするため、一層、心身を鍛え、学ぶことの幸せを懐いっぱい享受して、汗してこそ道拓く・夢拓く、かいこはく、人生たらむことを希望してやみません。

支部だより

角田支部だより

小形 とき子

（生活20回・角田支部）
母校の創立百周年おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。

令和2年度の第6回角田支部総会は、令和2年5月31日に開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染拡大の現状を鑑

みて、当日支部役員会を開催することで総会に代えさせていたできました。

本来であれば会員の皆様に参加していただき親睦を深めたいところでしたが、非常に残念に思いました。

母校の創立百周年記念式典に支部会員が出席できなくなり、角田支部としてお祝いの行事を新たに考えた時、前角田支部長の故佐藤一馬氏が在校生時代に校歌が無くて残念な思いをし、当時の校長先生に作って欲しいと要望したことを何度となく聞かされていた会員から「母校の校歌のルーツを訪ねる」という案が出されたので、移動研修会を企画し、創立百周年記念式典が挙行された次の日の11月7・8日に実施しました。

1日目、校歌の作詞者白鳥省吾記念館（栗原市築館）に行きました。記念館では「写真で見える省吾の生涯―生誕百三十年を迎えて―」という企画展が開催されていました。今年話題になつているNHK連続テレビ小説「エール」の主人公のモデル、また母校の校歌の作曲者の古閑裕而氏との交流の書簡等を併せて見て欲しいと特別展示されていました。その他、白鳥氏が作詞した小・中・高等学校の校歌等が録音されていて聞くことが



できましたが、我が母校の校歌は、学校名の紹介のみでした。車中で校歌を歌おうと、校歌を録音したカセットテープを持参していたので、記念館の責任者に「機会があつたら是非、伊具高校の校歌を録音して紹介してください」と依頼したところ、快く了解して頂きました。何年か後に再び訪れ、聴けることを楽しみに記念館を後にしました。

2日目、福島市に行きました。「古閑裕而まちなか青春館」「古閑裕而記念館」を見学しました。古閑氏が作曲した校歌・応援歌は、全国で310曲。東北で119曲。うち福島県が109曲だそうです。残りの10曲の中に母校の校歌が入っていることが分かりました。

偉大な作曲家古閑氏と、宮城県栗原市生まれであることを愛し詩人で民衆誌派の代表的な詩人白鳥氏の二人から生まれた校歌については創立百周年記念誌に詳しく紹介されています。

移動研修を終えて、2020年は、母校の創立百周年を同時に祝ってくれているかのように、校歌の作曲者と作詞者が脚光を浴び、話題になつてきていることは、「なんと素晴らしい巡り合わせなのだろ」と嬉しく思う気持ちには、私



に思いました。
令和3年度の第7回角田支部
総会・懇親会は令和3年5月30
日(日)に開催する予定でおり
ますが、新型コロナウイルス感
染拡大の様子を見ながら、会員
様には連絡致します。

仙台支部役員会の開催

渡部 竹彦

(農業17回・仙台支部)

母校創立百周年のお祝いを申
し上げます。

当支部は令和2年10月17日
(土)の昼に仙台駅前前の菜時季
大原に於いて、10人出席のもと
役員会を開催しました。先に5
月逝去の故大蔵支部長に黙祷を
捧げてから、菅野副支部長の挨拶
で開会し、本校同窓会総会の
結果伝達、母校創立記念事業の
伝達を行いました。続く役員改
選では新任幹事6人を承認した
あと、菅野昌治副支部長を支部
長に、佐藤稔幹事を副支部長に、
高野輝子幹事を顧問に推挙する
議案及び会則の一部改正案を全
会一致で承認しました。その後、
会食懇談に移り、在校中の想い
出や古郷の話

題で和やかに
親睦を図りま
した。その中
で、元年10月
の台風で郷土
が甚大な被害
を受け辛い思



いをしましたが、在校生は労を
いとわず復旧作業と募金活動、
仮設住民に生活必需品を配布す
るなど、様々な取り組みについ
て新聞報道されたことが紹介さ
れました。母校は総合学科に改
編後も実業校の歴史と伝統が受
け継がれ、後輩達がその名声を
広めている事に役員一同大変誇
りに思い感激いたしました。ご
教導の教職員の皆様には心から
感謝を申し上げます。新型コロナ
ナ罹患防止のため短い時間でし
たが同窓の絆を深め、次回は東
京オリンピック後の再開を約束
し閉会しました。

支部役員は年々高齢化する一
方ですが、古郷への愛着心は衰
えず、皆で協力し母校を支えて
行こうと申し合っています。
今年には新型コロナウイルス禍が収束後の
総会を開催すべく、会員の掌握
に努めて行く方針ですが、若き
現役世代の定住先把握に難儀し
ています。仙台とその周辺市町
にお住いの同窓の皆さんから情
報をお寄せ頂ければ幸いに思
います。ご協力の程宜しくお願
いいたします。(事務局〇二二、
三七八、二〇五七 渡部方)

金山支部だより

石田 隆

(普通7回・仙台支部)

宮城県伊具高等学校創立百周
年おめでとうございます。
心からお祝い申し上げます。

昨年11月6日には、記念式典
も挙行されました。私も実行委
員の一人として出席させていた
だき、伊具高校の卒業生である
ことに大きな誇りを感じたとこ
ろであります。

ただ、今回は百周年という最
大の節目であり、本来なら同窓
生はもとより父兄、そして地域
の人たちと多くが集い、盛大に
祝われることだったでしょうが、
新型コロナウイルス感染症拡大
の防止のためとして参加者を最
小限にとどめざるを得なかった
こと、祝賀会も行われないう
簡素なものにならざるを得な
かったこと、寂しく残念でなり
ませんでした。しかし、そのよ
うななかでもそれぞれが輝かし
い歴史に思いを馳せ、整然と挙
行されたことは素晴らしい。「質
実剛健 穩健着実」の校訓が脈々
と受け継がれていることを実感
しました。

さて、金山支部では昨年12月
6日、役員会を開き、支部総会
の開催について話し合いました。
結論として、「このコロナが拡
大する今、懇親会はもとより総
会も控えるべし。」との結論に
なりました。

今母校は、新しい世紀・
101年を力強く歩み始めまし
た。私たちはその歩みを暖かく
見守りつつ、できるだけ早い時
期に総会を開催し、記念事業や
式典の様子を報告し、共に喜び
合うこととしました。

会員の声

母校との縁

和田 (六戸) 信作

(農業34回・館矢間支部)

2020年11月6日、伊具高校
百周年記念式典を無事終えるこ
とができた事を、本当につれしく
想っております。3年前から百周
年事業の取り組みが始まり、諸先
生方の行動、同窓会諸先輩方の
色々な経験・意見に基づき、私達
現PTA役員も執行委員として迎
えてきた百年目が...。何故。コ
ロナ禍に惑わされる事になるとは
3年前に予想は困難でした。

私は昭和55年に伊具高校に入
学し57年に卒業して、同じ伊具高生
だった妻と巡り会い、子供4人に
恵まれて、その子供達も全
員伊具高校を卒業する結果とな
り、縁とは本当に解らないものだ
という事を実感する次第です。私
自身伊具高校で勉強し巣立った後
も、自信を持って誇れる学校です
し、先生方達も人当たりの良い人
達ばかりだった印象でありまし
た。

本年度を最後に生徒会副会長・
会長、そしてPTA監事・幹事・
副会長として、色々な人達と出会
えた事を忘れず、今後も伊具高校
の発展と皆様方の御健勝を願っ
ております。

丸森町の

復興のシンボルとして

黒田 楽人

(総合18回)

私は去年3月に伊具高校を卒業
し、卒業後間もなく丸森町役場に
桜の植樹を行いました。これは町
内でまちづくり事業を手掛ける一
般社団法人YOMOIYAMA C

OMPANYの協力によるもので、
伊具高校でまちづくりゼミを開催す
ることになり、高校3年次の時に友
達と一緒にこのゼミに参加しました。
少しでも丸森町に協力できたらと思
い参加を決めました。丸森町は一昨
年10月12日、令和元年東日本台風
により甚大な被害を受けました。豊か
だった町は失われて、その時少しで
も町を明るくしたいと思い、自分達
で何ができるのかと考えたところ、
桜を植樹し、少しでも自然を取り戻
し、復興に向けていきたいと思いま
した。

桜を植えるまでにはたくさんの方
の協力があった、桜プロジェクトを
成功させることができました。
ボランティア活動がテレビで放送さ
れ、その時宮城県農業高等学校の生
徒がこの放送を見ており、ぜひ桜の
苗木を提供したいと申し出られ、宮
城県農業高等学校から苗木を譲って
いただきました。

植樹はどこにするのか、丸森町役
場と話し合いを行いました。私達は
たくさんの人に見てもらいたいと思
い、役場の庭に7本植樹しました。
少しでも早く復興し、町民の皆様
に元気になってもらいたいと思いま
した。プロジェクトが成功できたのは
丸森町役場、YOMOIYAMA C
OMPANY、宮城県農業高等学
校など多くの人の協力によって無事成
功することができました。感謝しき
りません。桜の花が開花し、町民の
人たちがばかりでなく、町外の人にも
見てもらい、明るい気持ちになっ
てもらえれば嬉しい
です。早く桜が開
花し、みんなでお
花見ができたらよ
いと思います。桜
の花のように丸森
町も美しく明る
くなっていければと
願いを込めました。



母校だよ

仮設住宅への寄贈

3年 八巻 一斗

今回私たち機械系列は、「伊具高の力プロジェクト」を立ち上げ、地域おこしとブランド化のために、チームごとにもつづりを行いました。私のチーム

母校創立百周年記念本会事業について

令和元年10月26日の臨時総会で可決された同窓会として創立百周年を記念する協賛について、台風19号の甚大な被害が発生しているなかではありましたが、321名の会員・有志の皆様や42もの地元企業様のご賛同を得て、母校の創立百周年を祝うにふさわしい懸垂幕昇降装置一式と懸垂幕2枚を母校に寄贈することができました。ご協力いただきました皆様ありがとうございます。

- 1. 内容 懸垂幕昇降装置一式
懸垂幕2枚（「祝宮城県伊具高等学校 令和二年創立百周年」
「校訓 質実剛健 穩健着実」）

- 2. 事業経過

令和元年10月26日（土）	臨時三役会・評議員会・総会にて事業が承認
令和元年11月1日（金）	募金活動開始
令和2年2月27日（木）	寄付申込（県教委へ）
令和2年3月11日（水）	寄付承認（県教委より）
令和2年3月18日（水）	見積合わせ
令和2年3月18日（水）	業者決定（市川産業） （工期 令和2年3月19日～令和2年4月20日）
令和2年4月17日（金）	取付工事終了（母校創立記念日）
令和2年4月20日（月）	完成検査



寄贈した懸垂幕昇降装置および懸垂幕

では、寄贈する仮設住宅の方々からのアンケートをもとに、「傘立て付き棚」の製作を行いました。

私たちが実際にアンケートの呼びかけに伺った際に、どんな事に困っているのか、どのようなどころが不便なのかなどの声をたくさんいただき、実際に見させてもらいました。そこからメンバー全員でどのような物を

貰えた嬉しさの考え、考案しました。私自身も昨年の台風19号の被害に遭い、仮設住宅で過ごした経験があったため、当時自分が何に困っていたのかも含めて、考案しました。



寄贈した棚と椅子

傘立て付き棚の設計を終え、仙南マシクラブの方々の指導のもと、製作に取り組みました。一つ一つ行う技術が授業で習ってきた内容より遥かに難しかったため、作業により集中して取り組みました。また、今回は製作した作品を実際に人に渡すという責任感も必要だったため、受け取る側の気持ちになって製作することを心がけました。
贈呈日当日に棚を贈った際に、「よくできています。大切に使う。」などの多くの感想の声をいただきました。今回の棚作りを通して、人が使う物を作るときの責任の大きさ、製品を渡した後のやりがいを感じることができました。どのように製作したら使用してくれる人が喜んでくれるのか、そのためにはどのような設計で、どのような用法で作れば良いのかなどの必要性を改めて再確認することができました。また、人々から感謝の気持ちを受け取った際に、本当に作って良かったと心から思うことができました。

生徒の活躍

今回学んだことは、どれも将来社会人になった時に、必要になってくることです。今回経験したことを忘れず、これから一人社会人として活躍していきたいです。

- ◆ 県家庭クラブ連盟研究発表大会 優秀賞 2年 酒井 奈美
- ◆ ミツバチの一枚画コンクール 団体奨励賞 星 愛未
- ◆ 仙南新人陸上競技大会 男子やり投 第3位 2年 星 就也
- ◆ 生徒活動成果発表会 奨励賞 電気機械部
- ◆ 丸森町大張地区 沢尻畑田写真コンテスト 特別賞 2年 仙石 雅揮
- ◆ 全国高校生花生けバトル 準優勝 3年 齋藤 優花
- ◆ 全日本アンサンブルコンテスト 県大会予選仙南地区大会 管打楽器六重奏 銅賞
- ◆ 管打楽器ソロコンテスト 南東北大会 銅賞 1年 吉田 航平
- ◆ 全国学生書道展 団体 全国表彰
- ◆ 半紙の部 優秀賞 3年 釧明あすか
- ◆ 半切2分の1の部 優秀賞 3年 川崎 結

◆ 県高等学校溶接技術競技大会兼高校生ものづくりコンテスト県大会溶接競技部門代替大会 団体戦 3位入賞

3年 山口 真矢
3年 佐藤 直人
2年 石塚 悠希
5位入賞(優良賞)
2年 石塚 悠希

◆ 全日本製造業コマ大戦 2020学生大会 まほろばホール場所 第3位

3年 百井瑠輝亜
3年 松本 琉生
3年 佐藤 直人
3年 渡辺 楓

◆ 編集後記 「秋晴れの澄んだ大気のなかで、母校創立百周年を祝う記念式典が多くの同窓生参加のもと開催され、校歌「阿武隈川は洋々と…」の大合唱が会場に響き渡る。」そのような光景を思い浮かべながら準備を進めてきた百周年記念事業も、コロナ禍の影響を受け、縮小して開催せざるを得ませんでした。母校に足を運び、その喜びを分かち合いたかった同窓生の皆様の悔しさはいかばかりだったのかと察するに余りあります。しかし、同窓生の母校に対する思いは間違いなく伝わっていくことでしょう。在校生がその思いを引き継ぎ、母校の発展に寄与してくれるに違いありません。時節柄、会員の皆様にはご自愛くださいますようお願い申し上げます。

同窓会事務局 鈴木英晴 池田友利